

# 生涯学習は生活者の視点にたって

## 見 目 明 継

### 【目次】

- 1 生涯学習と生活者
- 2 生涯学習の現実的課題
- 3 生涯学習と自己実現
- 4 日常生活の中の学び

## 1 生涯学習と生活者

生涯学習と生涯教育は表裏一体をなしている。現代人の多くが、自分の日常生活を原則として他から強制されて過ごしているわけではないことを踏まえると、広義に捉えた生涯学習とは「社会で行われている全ての教育」を個人個人が自発的・主体的に学習することに他ならないと言えよう。

生涯学習が、人の一生涯を通じて続くものであるとするならば、生涯のそれぞれのステージに応じた在り方が存在するはずである。したがって、教育を人生の初期にのみ限って考えるのではなく、人が一生涯にたどる学齢前、学齢期、成人期、高齢期の全てを統合させて教育を捉えることを前提とすべきある。また、家庭教育・学校教育・社会教育、産業教育等の全てを包含するものが生涯学習なのだから、当然のことながらそれらを単独のものとして扱うのではなく、相互に関連のある統合させたものとして捉え直さなければならない。

このような考え方に立つならば、保健・福祉、消費者教育、防災訓練・交通安全教育、各種の技能訓練、趣味を深めること等々、非常に多岐にわたる分野および領域、すなわち人の日常生活に関わるすべて分野および領域が、生涯学習の対象範囲になることを改めて確認できよう。

行政的には、それぞれ別々の所管であったいわゆる縦割りの行政組織を、抜本的に改変して前述の基本方針に基づいた新たな組織化が求められる。すなわち、家庭教育、学校教育、社会教育などと明確に区分され、別々の事柄とされてきたきらいのある、これまでの在り方なら

びに対応の仕方を、上記の前提にたって全面的に構築し直す必要がある。

国の施策面について見るならば、文部省、厚生省、労働省、農林水産省、通商産業省等、政府の各省庁において、いわゆる幼稚園・学校教育、広義の福祉政策、勤労者対策、農業政策、産業政策等々の個々になされている政策を、大転換させ一本化することが不可欠になると言えよう。その際の大前提とは、「一人一人がその一生涯をより良く生き活きと希望と平安をもって生き、そして心安らかに死を迎える」ということを支援し達成し得るようにすることである。さらに、国の行政が行う政策の立案は、生活者の視点、もしくは生活者が生涯を全うすることを支援するという視点に立つて行うことにより、この国に生活している人々の心身の健康と希望と安寧を目指すことになるはずである。

都道府県・市町村においては、国の基本方針に沿いつつも、地域の実情を十分に踏まえた行政施策を実施することが望まれる。また、このことは、地域に生活している人々の日常に根ざした地域住民参画による地域行政への方向付けを促すことにつながっていかざるを得ない。

## 2 生涯学習の現実的課題

それでは、現実問題として、個々が一生活者である私達は、どのような視点に立つて、生涯学習を進めようとしているのであろうか。

先ず第一に、心身ともに健康で日常を生活していけるようになるための能力獲得、言い換えれば「いのち」とか「生命」とかいわれることの維持保全のための能力獲得。第二に、日常の生活をより良い状態に向上し続けるための能力獲得。第三に希望、達成感、充実感、幸福感、平安などを得るための能力獲得。私たちは、本人が自覚的か否かは別として、以上の三つの視点に立った学習を現に進めているか、或いは進めようとしていると考えられる。

第一の領域では、①生活習慣病予防のための各種の講座、②健康維持・増進を図るための各種の講座、③妊婦、乳児および幼児の育児のための各種の講座、④食品衛生および栄養、食生活に関する各種の講座、⑤防犯、交通安全、防災、に関する各種の講座或いは講習会、相談等々が開設・実施されている。

第二の領域では、個人、家庭或いは家族、地域社会、各種の職業現場において遭遇する多様な問題を処理・解決するために必要となる能力の向上ならびに能力の開発に関する各種の講座、講習、研修等が、国、地方自治体、大学、民間団体、企業などにより開設され実施されている。

第三の領域では、文化、芸術、宗教、スポーツ、レクリエーション、趣味、娯楽等々多岐にわたる講座、講習会あるいはグループ活動等が、大学、自治体ならびに各種の民間団体等によって開設・実施されている。

第一および第二の領域は、日本が確実に少子化、高齢化、高度情報化、国際化の方向へ、急激な勢いで突き進んでいる現状を反映していると思われる。これらの領域は、目に見える、或いは具体的な形をとれるものである場合が多い。そのようなものは、一時的には私達に成就感、満足感、喜びを与えてくれ、自分自身が生きて存在していることを覚えさせてくれる。しかし、これらは時間が経過すると、あとには、虚しささえ残し、貧しい心を形成させてしまう、恐ろしい魔物であるとさえ言えるのではない。

これに対して、第三に関わる領域は、物質のみによっては得ることの不可能な、目には見えない、しかも具体的な形にもならない、第一および第二の学習成果によっても得られることの不可能な領域、つまり心の状態に関する課題も含まれている。すなわち、永続的な心の満足、平安に関わる領域に属するものが含まれている。究極的に言うならば、第三の領域は、人が「生きている喜び」、「活かされていることへの感謝」を通して、実際の自分自身を肯定し、素直に受け入れられる自分になるための学習であると言ってもよいであろう。人は、この領域の学習成果として、どのような悲しみ・苦しみの中にあっても、喜びと感謝のうちに永続する希望と平安が与えられるように変えられていくのを実感するであろう。

現代は、物質的に飽和状態、いやむしろ過飽和の状態にあるにもかかわらず、心理的には必ずしも満足感がなく、それどころか不満だらけの人も多い。この状態は、人々が物質的に恵まれておらず貧しかった時代に心に描いていた、「物質文明の進展は人々を幸せにしてくれる」とする想いが幻想にしかすぎなかったことをあぶり出していると言えるのではないだろうか。このようにして考

えるとき、「人はパンのみで生きられず、心のマナ（たべもの）がパンと共に必要である。」とする聖書のみことばが、ずっしりと心に響く。

ここまで見てきたように、生涯学習においては、心の問題が非常に重要である。だが、他方で、生涯学習は、ともすると人々の趣味を楽しむための能力開発、あるいはそれを高め、それらをとおして日々生きる喜びを得て、心身に幸せ・満足を感じられるようにすることに偏る形で捉えられてしまいがちという問題もある。そして、こういった場合、生涯学習はあくまでも個人の問題に還元されがちである。

我が国は現在、少子高齢社会に向かって急速に突き進んでいる。この流れは国際社会のなかで類を見ないほど、深刻なものである。それに加えて情報化、国際化の潮流が否応なしに迫ってきている。このような社会・生活環境の激変のまっただ中に、心身共に健康でしかも生きる希望を持って毎日を生活していく能力を養い身につけていくことが、今ここに生きる私達にとって、切実な問題になっていいる。

### 3 生涯学習と自己実現

改めて確認しよう。人間は生きている限り、生きている一瞬一瞬、時々刻々が学びである。この学びは母親の胎に最初の生命を得てから、誕生、少年、青年、成人、高齢者、ついには死に至る瞬間まで、延々と続くのである。いわゆる揺り籠から墓場まで、人間の一生涯を通じて、自分が欲すると否とに関わらず、また自覚的か否かとを問わず、生涯にわたって学習をし続けることになる。さらに言えば、生涯学習とは日常茶飯として出会う様々な出来事に意識的に対応して、個人が真の意味でより良く生きる能力を獲得するとともに、その能力を高めていくことであると考えられる。

それでは、生涯学習を通して、私たちは最終的に何をしようとしているのであろうか。結論的に言うならば、私は、人間が大自然の中では、いかに小さな存在に過ぎないかを識り自覚し、自らを変えていくことではないかと思う。だがそれにもかかわらず、一般的には自己実現を達成しようと望んでいるのではないだろうか。

自己実現達成は、一般に私たち人間にとって、あたかも最終の到達目標点であるかに思われがちである。しかし、そう考えることに危険はないのだろうか。というのは、そのような考え方は、人間に驕り高ぶり、傲慢さをもたらしかねないという恐れを多分に秘めているように思われるからである。さらに、人間は、自己実現の達成

のために神様や仏様をも動員してしまうと言う、傲慢で罪深い存在であるという面も否めない。

よく考えてみるならば、自己実現を達成したとしても、それは未だ道半ばでしかないと言える。山登りに例えるならば自己実現の達成は、山の頂に到達したようなものである。喜びや感激は永続することが無く、そのまま山頂に留まることは極めて不安定である。麓にまで無事下山できて初めて、登頂の喜びや感激は永続性を持つのである。

このような視点に立つと、生涯学習とは、私たちが自己実現の達成を経て、さらに自己否定に至る過程であると言っても差し支えない。自己否定という言葉はいかにもマイナスイメージを与えがちである。しかし、自己否定は、自分が大自然の中でいかに無力で小さな存在であるかを識らせてくれ、このような自分を生かすために、自分を取り巻く全ての存在が働いていてくれていることを実感させていただくことではないかと、私は考えている。逆説的ではあるが、私たちがそのことを自覚することを通して、人間に、真実の自分自身の無力さを肯定させ、それによって人間に謙虚さが与えられ、生かしていただいていることに対して感謝しつつ、希望と愛のある生活を生涯にわたって送れる幸せが与えられるのではないかと。私は、そのように自己を変えることを通して、自分自身とともに他者をも尊重し、愛し、希望を持って生き活きと生かされている喜びのなかに生きられるようになれると信じている。

このように考えてくると、生涯学習の実践は、人間社会がひいては地球の全ての環境が、望ましい姿に置かれることを可能にすることに繋がっていると言って良からう。

## 4 日常生活の中の学び

これまで述べてきたことから明らかなように、人は生きて生活している限り、一生涯を通じて自分が欲すると否とに関わらず、嫌でも応でも生涯学習をし続けなければならないという宿命にある。この現実を素直に謙虚に受け入れ、真に理解し納得するならば、「日常の何気ない生活こそが生涯学習の大部分を占めている」ことに気付かされるはずである。このことを裏返して考えると、生涯学習とは、必ずしも、殊更に肩に力が入ったものではなくてはならないものではない。

日常生活の中に、学習の機会および場は、私達の周りにたくさん用意されている。要は、日常茶飯として出会う様々な出来事に意識して対応し、自分の中に体系化さ

れるようにすることを通して、人が真の意味でより良く生きる能力を獲得すると共にその能力を高めていくことではないだろうか。したがって、生涯学習は私たち個人個人が日常生活を意識化し、得られた知識・体験などを体系化していく過程に他ならない。

私自身が自戒の念をこめて言うならば、日常的な努力の方法としては、最も手っ取り早く、しかも簡単なものとしては、メモ帳を用意し、こまめに記録をとり、整理して活用することを実践していくことである。これに限らず、日常的にささやかでも着実な実践を積み重ねることが、生涯学習を深めて広げていくために、非常に重要だと思われる。